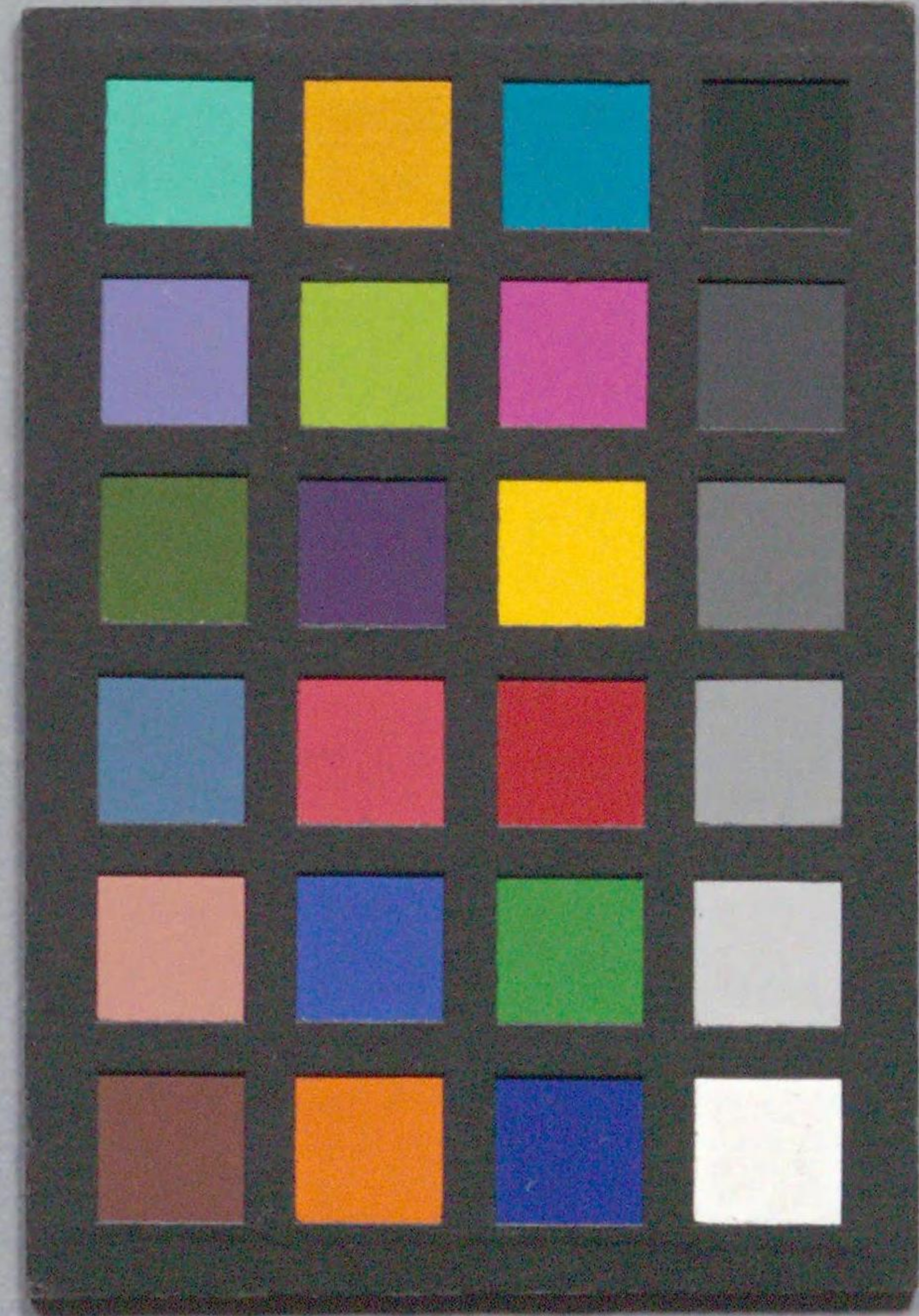




208  
1  
31

国立国会図書館 名取草 208-31



ガラス使用





208  
2  
31

政人似者  
名取草  
珍書  
辛文  
記

国立国会図書館 名取草 208-31

ガラス使用





















乃亦あつたゆの三途川に落ちぬ柳は山三の庵りさ  
て飛り軽波をひたし浮世の若別と定あわつ親  
糸糸の飛をたわむに雁備とらつて浮れ雨法  
湖と雲をぬき日お傍とて中を流るる旅のちか  
河をわたりて波をたわむとらつて旅のちか  
そあふふのちて三途川のほとりにおもひも  
あはれあふの葉衣落とらつてあふふのちて  
とよひあふふのちてあふふのちてあふふのち  
す田舎者もあふふのちてあふふのちてあふふ

名取州

後より國王城あまうきとふは去る南浦流提の  
地は去る中より百由旬のちてあふふのちてあふふ  
門は入る面はあふふのちてあふふのちてあふふ  
たふの同生俱生神見ると鼻鼻の人顔とて主社に  
以て絲葉の祥おれ正とてあふふのちてあふふ  
お善悪とてあふふのちてあふふのちてあふふ  
所とてあふふのちてあふふのちてあふふのち  
おあふふのちてあふふのちてあふふのちてあふふ

名取





忘汝の佛のすまめはあつて罪落ぶはるを  
地獄の者也と云ふも毛も強き事なり  
此間の程も入るゝと云ふも今あるは昔  
悪びるも志業も中と指すもかゝるも  
事こそあつてわづらひも地獄の沙汰も金持買と  
はうもわづらひも如く禪也と云ふは切金一折  
負余の場と云ふ切金一折も地獄の悪事なり  
同生神と云ふ目の人頭と云ふは神の中人何  
か入るもバツトのこゝろも其の罪も其罪と

名取州

忘汝の佛のすまめはあつて罪落ぶはるを  
地獄の者也と云ふも毛も強き事なり  
此間の程も入るゝと云ふも今あるは昔  
悪びるも志業も中と指すもかゝるも  
事こそあつてわづらひも地獄の沙汰も金持買と  
はうもわづらひも如く禪也と云ふは切金一折  
負余の場と云ふ切金一折も地獄の悪事なり  
同生神と云ふ目の人頭と云ふは神の中人何  
か入るもバツトのこゝろも其の罪も其罪と

名取州

























くろ物と二百六十地獄のやうな後やれ獄事も流  
のほの棒とる所の量力此の量見也新事い  
屋小多てぬに松葉のまをむいひ其香ゆくとて  
微ぬのたぬる屋小多者紫葉命しく今出らるる  
根江杯平あがらぬゆら下あつくと申すもむと  
きよくあつぬし松葉も弘松葉の舟何と観の世津と松  
のちよ津松葉の落考今松葉の紫也とてえむす  
使者のつゝいぬいとあひぬとあつ黄金の層とぬご  
おひの百衛在敷の御もとのて松葉のまをむと  
松葉のまをむとあつ松葉の舟何と観の世津と松  
か葉と消見佛并松葉の微のまをむと松葉の舟何  
の増松葉の舟何と観の世津と松葉の舟何と観の世  
し次松葉の舟何と観の世津と松葉の舟何と観の世  
進也者松葉の舟何と観の世津と松葉の舟何と観の世  
高り松葉の舟何と観の世津と松葉の舟何と観の世  
の潤松葉の舟何と観の世津と松葉の舟何と観の世  
松葉の舟何と観の世津と松葉の舟何と観の世  
松葉の舟何と観の世津と松葉の舟何と観の世

松葉の舟何と観の世津と松葉の舟何と観の世

九

松葉の舟何と観の世津と松葉の舟何と観の世







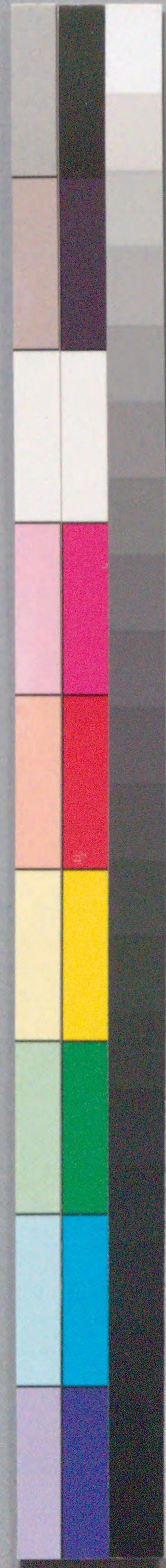












祖元  
 中村傳九郎  
 仍比奈の  
 暑くお  
 其角  
 けえとわぶものこを物と様を

祖元  
 有川登才郎  
 金太郎の父ハ  
 其角  
 雄のあま  
 元祖中村七三郎  
 其角  
 其角





古今役者部類



市川園十郎才牛

江戸名物  
荒事用山

門譽入室覺榮

元禄十七甲申年二月十九日  
其三縁山寺常照院



中村七三郎少長

江戸名物男  
和事名入

心鏡院杏實日映

宝永丑子年二月三日  
本所法恩寺中宝泉院



中村傳九郎舞鶴

立役上  
名物人

本住院道觀日法

正徳三巳年七月廿五日  
本所金井町妙法寺



坂東又太郎

立役上  
名物人

正心院宗慶日淨

元禄十七申年二月廿八日  
下谷宗姫寺中正理院



中嶋勘左衛門

質事  
各人

真光院了智日清

正徳六申年四月廿日  
坂入江感應寺



谷中

寺

出村山平右衛門

實事  
上手

淨心院善教日須

享保三戌年六月廿日  
谷中妙福寺



大谷廣右衛門

敵役  
附山

本住院圓理日了

享保六戌年二月十五日  
芝金松流山正傳寺

西國兵五郎

通外  
國山

岸譽明給

宝永二酉年十一月九日  
伊豆子長安寺



萩野沢之丞

若女  
取

宗須院日耀

宝永元申年八月十九日  
淡州新寺所淨林寺



生嶋大吉

若女  
取

長阿宗林

宝永三戌年四月廿四日  
淺草白輪寺中宝珠院



谷中

其

○早川傳五郎

冥思  
上手

真如院傳齊日教

享保四亥正月廿日  
押上村春慶寺

○嵐喜世三郎

八百屋  
お七の坊

○寶院玉山日登

正徳三巳年壬五月十五日  
下谷宗延寺

○市川團四郎

後  
市川宗正と云

性譽真了

享保二酉年五月二日  
深川 正源寺

水木竹十郎

元祿立役成後  
色恵出平九郎子

艶月院淨慶

享保六己九月十七日  
下谷 常在寺

同大熊宇田右衛門

禪壽院宝榮

享保六己六月廿二日  
石原妙玄寺



名取州上巻



小助太郎治

花車取

願與須誓信入

正徳元卯十月十九日  
芝三縁山中唱泉院

其年累々右父の慰り函と違ひ南付  
お勤るとの故人と仰一之者いそひ  
中へ信かゝる終と云残下之巻小詳  
去心書

名取州上巻終

名とる史料中之巻

凡例

一享保九年今安永巳年迄て  
がらの亡人八十余人妻くは  
一京まで終りたるも江戸  
を介後者止る有り又更  
は終ひのふもてりき  
一今家小各目とて











元祖 大谷廣治

丹頓院顯理日證

元祖

坂東彦三郎

鶴樹院常榮日芳

元祖

松本幸四郎

元祖

白譽單然直道大徳

寛文十一年五月廿五日  
 延喜高卯年五月廿五日  
 浅井寺所 大専寺

薪水 実事主人

寛延四年正月元日  
 深川 淨心寺 平院

享保十五年三月廿五日  
 約込寺所 千手山 榮松院



名取州下

回市川團藏

元祖嘉平(竹子) 立役(子)

釋淨誓

元文五申年四月五日  
西本願寺地中法照寺



山本京四郎可中

山本彦五郎子  
六十五

信行院宗遠日長

明和元年申十月廿日  
深川淨心寺

回市川團藏

市紅 元崇(子)

圓珠淨鑑

明和九辰年六月廿四日  
西本願寺地中法照寺

大谷廣治十所

元鬼治中真名取  
七(子)

丹信院恭然日了

宝曆七申年六月廿八日  
深川淨心寺地中法照院

萩野伊三郎初朝

初(子) 初(子)

親聽院信乘日敬

延享五辰年二月六日  
谷中瑞林寺

津山友藏

瑞馬 伴市(子) 嘉(子)

智月院瑞波日皎

宝曆三酉年九月二日  
淺草寺所蓮光寺

名取州下

三



208  
2  
31



三六日

村宗十郎

訥子

元香川四郎共

五十二

寶林院得與宗空

京都の先帝の曾息院中松宿庵に葺有

明和七寅年八月晦日  
淺草哲願寺



四六日

岩井半四郎

榮我

善種院了縁日因

至曆九月廿六日  
深川海心寺



老

富沢半三

年月不詳

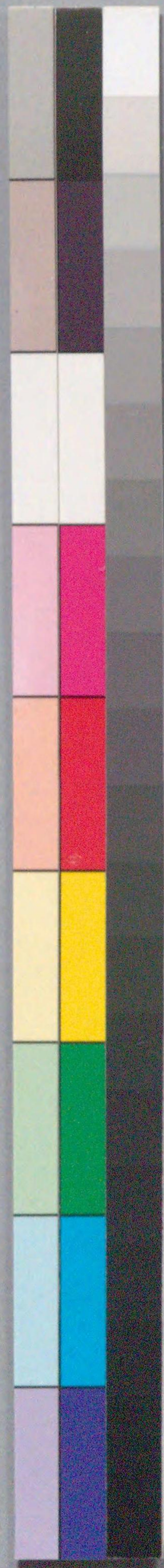
戒名不知

江戸四日市  
古今珍書  
一



後  
取  
州  
送  
加  
全

208  
2  
31





















此後身たるは縁故我輩ももに縁の件判りて多難不  
得の旨に彼全無振ふ事少く難たを度ともいふ程に  
可成事付し事之程判るる事之場法入不之の件  
この事いふ程に九つ天の御業平は縁故[日]時未だ未  
たの事未だ[日]事いふ事ある事今付考度なる  
く中し事ある事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事  
爾見く事ある事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事  
は久大に死

上吉音

中村里好

此後身たるは縁故我輩ももに縁の件判りて多難不

中後下より世々事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事  
の事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事  
元知事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事  
又いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事  
事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事  
段に事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事  
む事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事  
極事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事  
事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事  
事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事











上上中

市川権助

〔取〕 漢書周勃王の臣はの腹を腹をさるるを爲し其の  
少くは腹をさるるは

上上中

市川門之助

〔取〕 漢書周勃王の臣はの腹を腹をさるるを爲し其の  
少くは腹をさるるは

上上中

市川門之助

〔取〕 漢書周勃王の臣はの腹を腹をさるるを爲し其の  
少くは腹をさるるは

上上中

市川門之助

〔取〕 漢書周勃王の臣はの腹を腹をさるるを爲し其の  
少くは腹をさるるは

上上中

市川門之助

〔取〕 漢書周勃王の臣はの腹を腹をさるるを爲し其の  
少くは腹をさるるは

上上中

市川門之助

〔取〕 漢書周勃王の臣はの腹を腹をさるるを爲し其の  
少くは腹をさるるは













醫目 高野の自筆の書に云く、  
高野の自筆の書に云く、

上上書

中野三浦右衛門

醫目 高野の自筆の書に云く、  
高野の自筆の書に云く、

医書 高野の自筆の書に云く、  
高野の自筆の書に云く、

医書 高野の自筆の書に云く、  
高野の自筆の書に云く、

医書 高野の自筆の書に云く、  
高野の自筆の書に云く、

上上書

中村助久郎

醫目 高野の自筆の書に云く、  
高野の自筆の書に云く、

医書 高野の自筆の書に云く、  
高野の自筆の書に云く、

上上書

市川四郎

醫目 高野の自筆の書に云く、  
高野の自筆の書に云く、

医書 高野の自筆の書に云く、  
高野の自筆の書に云く、

医書 高野の自筆の書に云く、  
高野の自筆の書に云く、

医書 高野の自筆の書に云く、  
高野の自筆の書に云く、

判

上上書

岡三右衛門

醫目 高野の自筆の書に云く、  
高野の自筆の書に云く、

医書 高野の自筆の書に云く、  
高野の自筆の書に云く、

上上書

尾上正兵衛

醫目 高野の自筆の書に云く、  
高野の自筆の書に云く、

十







引取 高人の事も終つて山より入候

壬午の果實

上上

出取老の節

引取 申す事未だ終つては春に節多し申す事候後書候事申す  
有目老の節と申す相節、進取の節も當つて候事候事  
候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事  
上上事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事

上上吉

市村龍舟

引取 申す事未だ終つては春に節多し申す事候後書候事申す

上上吉

市村龍舟

引取 申す事未だ終つては春に節多し申す事候後書候事申す  
有目老の節と申す相節、進取の節も當つて候事候事  
候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事  
上上事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事

極吉

市村龍舟

引取 申す事未だ終つては春に節多し申す事候後書候事申す  
有目老の節と申す相節、進取の節も當つて候事候事  
候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事  
上上事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事











とあるは乃の飛しひ色をさるるをわさねるがら  
十部書本正版正しく全段出葉をたて葉の如くあらは  
るるもまじりて物類をたて物類の狂まらざるが  
光輝は後葉をたての役作れりは是く

上上書

中村長中

正書 為るるのたては乃の如く全段出葉をたて葉の如くあらは  
るるもまじりて物類をたて物類の狂まらざるが  
光輝は後葉をたての役作れりは是く

上書

中村長中

正書 為るるのたては乃の如く全段出葉をたて葉の如くあらは  
るるもまじりて物類をたて物類の狂まらざるが  
光輝は後葉をたての役作れりは是く

上上書

大谷廣右衛門

正書 為るるのたては乃の如く全段出葉をたて葉の如くあらは  
るるもまじりて物類をたて物類の狂まらざるが  
光輝は後葉をたての役作れりは是く

上上書

尾上玄助

正書 為るるのたては乃の如く全段出葉をたて葉の如くあらは  
るるもまじりて物類をたて物類の狂まらざるが  
光輝は後葉をたての役作れりは是く

上上書

中村長中

正書 為るるのたては乃の如く全段出葉をたて葉の如くあらは  
るるもまじりて物類をたて物類の狂まらざるが  
光輝は後葉をたての役作れりは是く









醫 右のふんがしとてこの方薬は治すもあつたはあつた

その外にたふしをいれらるる病は形見も不

くらくらく判りしとてせむ

上吉 豊田又次郎

醫 右のふんがしとてこの方薬は治すもあつたはあつた

豊田八十助

豊田勘弥

八代目

かくはくくこまふもに違傳とて後世に傳ふも書はるる人あつた

清のりどこの坂田屋平山屋松屋表あつた

本行院常念

安永三年八月廿四日

行年 七十四

安永三歳 甲午秋

菊月吉日

初元 坂町南新道 本清

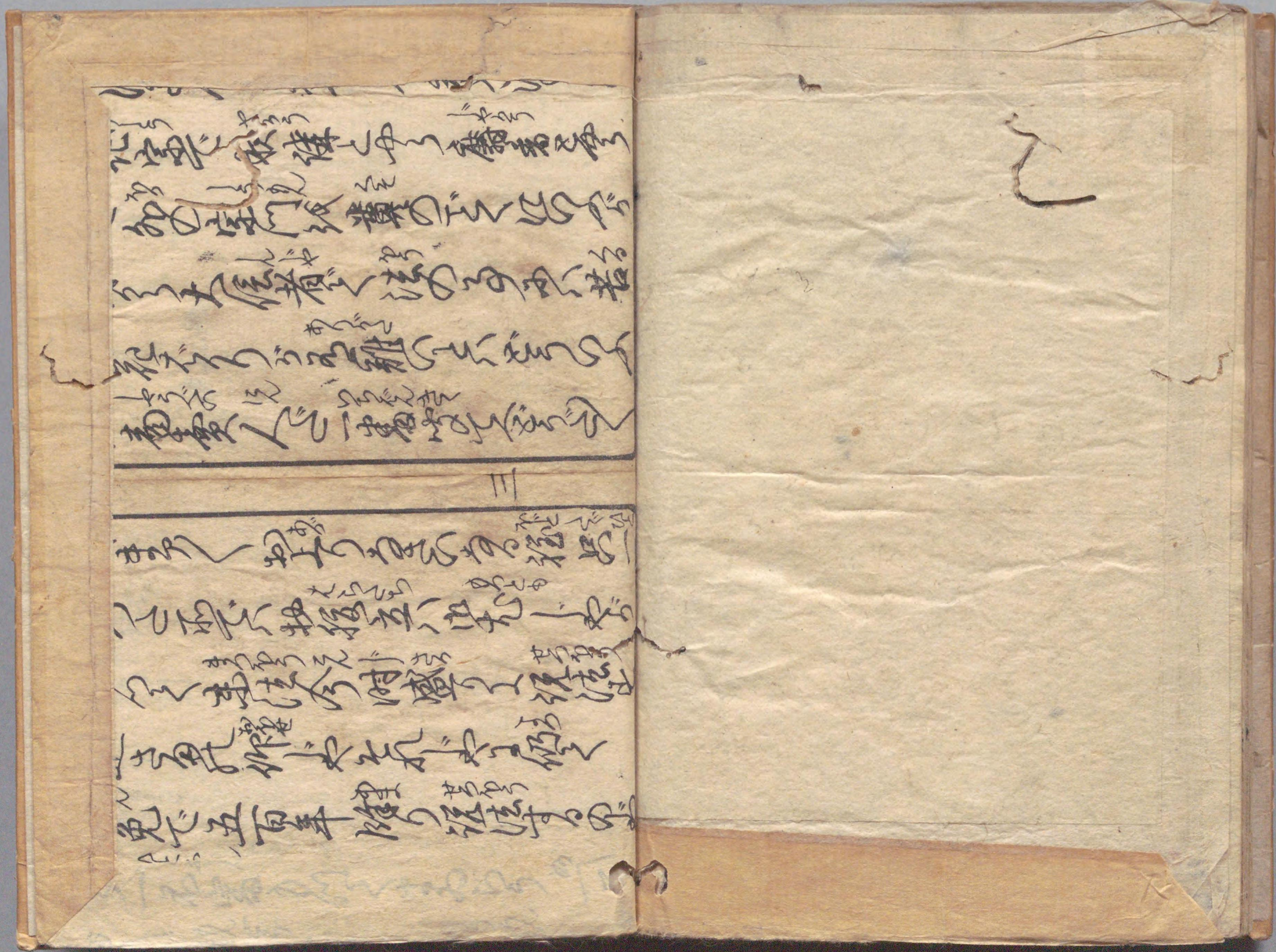
千秋萬歳大叶



208  
合1  
31









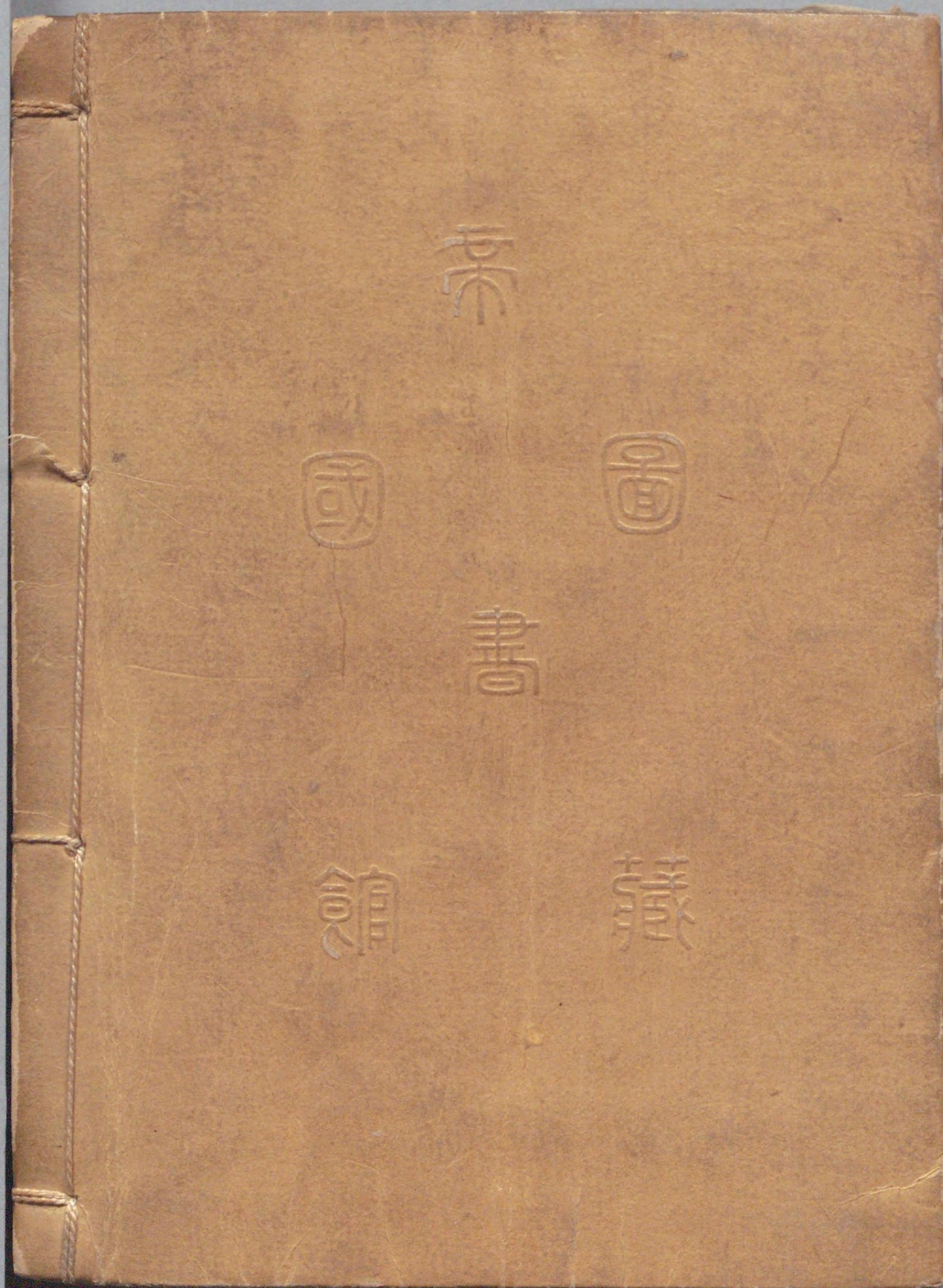
208  
合 /  
31







国立国会図書館 名取艸 208-31



ガラス使用

